日本SF小説新人賞

吉川さん快挙

『ペロー・ザ・キャット全仕事』

出会いは「仮面ライダー」

文学部の仏文科博士課程で「バタイユ」＝左面下注＝を専攻する、25歳の大学院生・吉川良太郎さんのSF小説『ペロー・ザ・キャット全仕事』（徳間書店刊）が、日本SF作家クラブ主催の第2回日本SF新人賞を受賞した。文体・ジャンルの枠を越え、自由自在に変化する〝吉川ロジック〟は、いかにして形成されたのか。本人のお話を中心に、その周辺を構成してみた。

（学生記者・山口　文晴）

純文学とSF文学の世界を自由自在に行き来する独特の〝吉川トリック〟。店頭には受賞作（下）に続いて、早くも第2作『ボーイソプラノ』（上）が＝中大生協で

「好き勝手に書いたら…」バタイユ専攻の大学院生

★暗黒街《パレ・フラノ》を真に支配する男

『ペロー・ザ・キャット全仕事』は、近未来のフランスの架空都市・パレ・フラノを舞台に繰り広げられるSF小説である。しかし、その文章の端々には、さりげなくカミュの『異邦人』や、カフカの『変身』といった作品へのオマージュ（日本の和歌に見られる模倣の技術である、本歌取りの手法を意識したそうだ）をみてとることができる。

そこで、皆さんは作者の吉川さんについて、どのような人物像を思い浮かべるだろうか。いつもこむずかしいことを口にする文学青年？　哲学的命題を終始考えるプチ思想家？　とんでもない。実際の吉川さんはスラリと背の高い温厚で爽やかな兄貴に見えた。

★改造人間の「仮面ライダー」の方がおもしろい

「特撮ヒーロー番組は兄の影響で見ていました。まだ小学校に上がる前だったですかね。なかでも仮面ライダーとウルトラマン・シリーズは好んで見ていた」という。「いま思うと、あれがSFとの出会いだった

気がしまね。兄は機動戦士ガンダムも好きだったんですが、僕はダメでした。ガンダムって機械だからゴツゴツしているんです。それより〝改造人間〟の仮面ライダーの方がはるかに面白かったです」。なるほど、いわれてみれば、『ペローザ・キャット全仕事』に登場するシモーヌやシムノンといったキャラクターたちも、機械が組み込まれた〝改造人間〟だった。

★14歳という多感な時に出会った「バタイユ」

仮面ライダーの洗礼を受け、小学生時代は〝怪獣博士〟として名を馳せた吉川さんが一躍、文学青年となる一大転機がやってくる。「中学生って、よくグループで行動しますよね。でも、中2の頃、ふと自分に疑問を持ったんです」。それは社会構造への興味だったのだ。数いる先達の学者、作家の著書をあれこれひもといた。その過程で吉川さんはバタイユの『マダム・エドワルダ』を読み、大きな衝撃を受けた。これが進路を決めるきっかけとなった。

★授業は全部出席！

「仏文学科があって、バタイユを研究している大学というと限られているんです。僕が受験生だった頃、中大に小笠原教授というバタイユを専攻している先生がいらっしゃった。それで大学を下見にきたら、なかなか落ちついた雰囲気でしたので、じゃあ、ここにしよう……と」。知的好奇心が旺盛な吉川さん、中大の授業から受けた影響は計り知れない。「授業にはほとんど出ました」と何気なくいわれた。スゴイ。

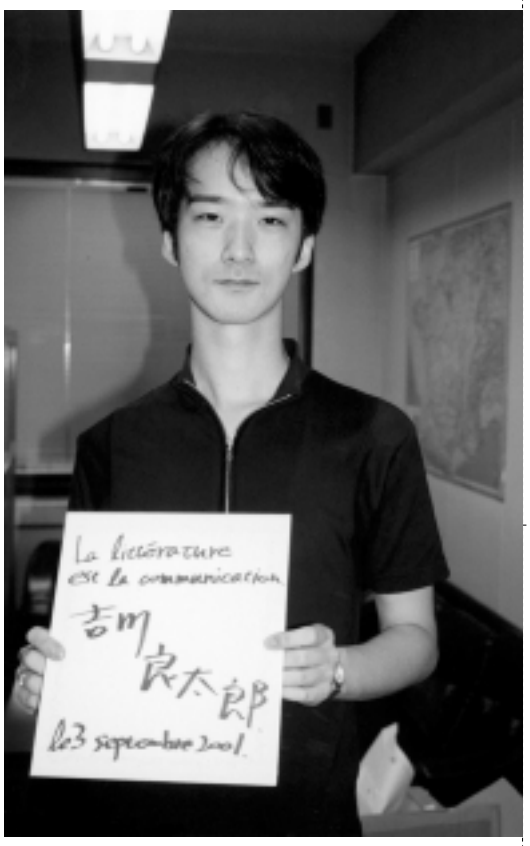
★SF文学界のトリックスター

作品中の文章は、純文学とSF文学の世界を自由自在に行き来する。まるで『ペローザ・キャット』のなかで、暗黒街のマフィアの間を絶妙なバランス感覚で渡り歩く主人公のペローザのようだ。まるでSF文学

よしかわ　りょうたろう

1976年6月17日生まれ、新潟市出身。中央大学大学院フランス文学科博士前期課程在学中。受賞作のほか、『ボーイソプラノ』（徳間書店刊）がある。

サイン色紙を手にする吉川さん



ジョルジュ・バタイユ

（1867～1962）

フランスの思想家。著作は小説、詩、評論、社会科学と多岐にわたる。「人間の諸活動は、地上のさまざまなレベルにおける余剰の非生産的消費としてみることができる」という「普遍経済学」は、社会学のみならず、経済学にも影響を及ぼした。

代表作に『マダム・エドワルダ』『内的体験』など。

界のトリックスターなのだ。学部生の頃は文学会とSF研究会に所属していて、文学会ではもっぱら詩の創作をしていた。今回、SF小説を書こうと思ったきっかけは、「SF研究会では会の活動と平行して、小説の発表も行いました。ただし、『ペロー・ザ・キャット』に関していえば、もともと賞に応募するつもりで書いた作品ではないんです」。

★卒論、就職活動、大学院試験：

『ペロー・ザ・キャット』のあとがきに《この作品は大学四年時、ある思想家についての卒論と平行して書き留めたものである。もともと、どこに応募する当てもなかったので、意識して〝好き勝手に〟書いた覚えがある》とある。吉川さんは卒論と、もう一つ、就職活動にも追われていた。「公務員試験を受けたんですが落ちてしまって。自分自身、バタイユをもう少し勉強してみたかったので結局、大学院に進むことにしたんです」。進学の意思が固まったことで執筆活動にも俄然、勢いが出てきた。受賞作は夏にペースが上がり、秋口に一気に書き上げた。

★目指したのはSF文学と純文学の融合

吉川さんは「SFを研究している仲間からは、SF文学っぽくないとよくいわれる」というが、SF初心者から見ると、情報がコンピューターに制御されているパレ・フラノの街や、要所要所で登場する携帯端末などは充分、SFっぽい雰囲気を感じさせてくれる。しかし、吉川さんの話は続く。「SFというと、よくわからないとか、オタクっぽいというイメージが一般的ですよね。そこで、ペロー、キャットで〝長靴を履いた猫〟との関連を匂わせたり、ひと目でそれとわかる〝異邦人〟のパロディーを挿入してみたりして、なにかのきっかけにしてもらおうとしたわけです。SFも面白いじゃないか、ってね」。

SF文学会では作品に対する評価について賛否両論が沸き起こった。「純文学っぽいと文体への拒否反応がまず一つありました。それと一番多かったのが、常に集団から逃げようとする主人公の姿勢への批判ですね。これじゃあ、まるで〝ひきこもり〟だと」。日頃、バタイユの研究から社会構造について考える機会が多い吉川さんは、〝ひきこもり〟という行為もある程度は容認すべきだと考えている。

★院生生活と創作活動

日本SF新人賞を受賞後、吉川さんの生活にはどんな変化があったのか。「さすがに賞をもらった時は、大勢から祝福されました。〝わあ、すごいね〟といった程度でしたけれど、いまはそれも落ち着いて……。まぁ、原稿の依頼はくるようになりました。すでに第二、三作とも書き上がっていて、現在は第三作の校正をしています。いったん『ペロー・ザ・キャット』の世界から離れようと思ったんですが、編集者の方に説得されて、両作品ともパレ・フラノが舞台になっています」。

ところで「先生とか、呼ばれたりしませんか」とお聞きしたら、「呼ばれませんね（笑い）。ファンレターも、もっと来るのかなぁと、少しは期待していたんですが、いまのことろはまだ数えるほどですね。先輩の作家に聞いた話なんですが、ジュニア文庫の作家には、ファンレターが山ほど来て大変らしいですね」（笑い）。

（おわり）

文学部棟で談笑する吉川さん